

「近頃の若者の素顔は これだ！」

戦後70年の今年、安保法制（戦争法）に反対し続けた若者たちは集会やデモに参加して、他の人と対話することから学び、自分の言葉で語りはじめている。若者たちの動きは、世代や立場を超えたうねりを起こした。2015年12月15日夜、「非核の政府を求める京都の会」の常任世話人会で、民主青年同盟京都専従の東山翔伍さん（26）、京都産業大学1回生（男性、19）、同志社大学1回生（女性 20）の3人が約1時間半、なぜ、「街頭に出て声を上げはじめたのか」を語った。素朴だが、素直で切実で、心の中から発している言葉だった。権力に対抗する力を持たない小さな一人にとって、物を考え、理解しようとするのが力になっているのがわかる。刺激的で、心地よかった。熱は冷めていない。

——東山 翔伍さんの発言——

・2001年9月11日、米国で同時多発テロ（4機の旅客機がハイジャックされ2機は、ニューヨークの世界貿易センター、1機はワシントンの国防総省へ突入、1機はピッツバーグ近郊へ墜落）。この報復で、米国が2003年3月、イラク戦争を始めた。「なぜ、戦争が起こるのか」「どうやったら戦争はなくなるのか」と考えたが、わたしは15歳で、現実感はなかった。15歳の5月、民青同盟の働きかけで民青同盟員になった。中退したが、大学時代は、民青の高校生担当だった。

・広島、長崎の原水爆禁止世界大会に5、6回は参加した。「折り鶴」集めに取り組み、1000羽集めた。高校生なりに考えながら、街頭で署名集めをした。みんな、核兵器の廃絶を願っているのを知った。当時は、日本が「戦争をする国」になるとは思っていなかった。

・沖縄に行ったとき、（第二次大戦末期、沖縄で看護要員として動員され悲劇的な最期を過ごした女子高校の生徒の）「ひめゆり部隊」にいた人の戦争体験を聞いた。「自分だけが生き残ってごめんね」という思いをもちながら、次の平和を手にするために体験を話すことで、闘っている。「ひめゆり部隊」の人たちの人生は悲惨だった。そのなかで自分の使命を見つけ、悲惨な社会を変えるために、自分が社会にどう働きかけるかを考え、行動していた。

・憲法9条改憲の議論など安倍政権は「本気だ」と判断し、2014年、シールズと民青が東京で、一緒に若者集会をやった。「これまでとは違う人たちが立ち上がっている」と感じた。「戦争する国にしているのか」と問いかけると、2歳半のこどもがいる友人は、自分のこととして受け止めていた。みんな、共通の願いを持っていると知った。

・2015年の1年間は、自分も大きく変化した。若い人たちが自分の言葉で戦争、平和を語り始めた。シールズの彼ら彼女らは、「就職できなくなるぞ」などの攻撃を引き受け、誹謗・中傷にも屈せず行動している。「なぜ、こんな時代に生まれたのか」というのは受け身。自分が社会に働きかけ、どうか変えられるかが大事だ。

・長崎で被爆した谷口稜嘩さんは就職、結婚、差別、偏見に屈せずに声を上げ続けてきた。マイクを握って、「憲法9条をないがしろにした戦争法は許せない」と訴えた。

・国会前のシールズと重なった。涙が止まらなかった。「自分が進むしかない」と自分に言い聞かせた。戦争法の成立後の運動の目標は、「国民連合政府」づくりだ。決着を付けるのは、来年216年夏の参院選挙。仲間はある。

——京都産業大学 1 回生の発言——

- ・ 2015年4月に民青に入った。戦争や平和を考え始めたのは、2014年にイスラム過激派組織「IS（イスラム国）」が日本人人質を殺害した事件がきっかけだ。こんな残忍なことがなぜ、起こるのか。テロ、空爆の連鎖のなかで、「狂気」だけでは説明がつかない。
- ・ 戦後70年を迎える前、私の高校時には、安倍政権が特定秘密保護法を成立させた。世界のテロとつながるのではばいか・・・。
- ・ 2015年4月、京都産業大学で民青が、安倍政権の憲法改悪に反対する集会を開いた。これに参加して、マイクを握って話した。
- ・ 2015年6月21日、シールズのデモに初めて参加した。8月30日には国会前に行った。戦争法反対、集団的自衛権行使の閣議決定の撤回、憲法9条改悪反対・・・安倍政権を追いつめるためにシールズ、ママの会、学者の会の運動に参加してきた。次の戦いは、2016年夏の参院選、それに京都市長選だ。
- ・ 今の運動は変わってきている。シールズのやり方が市民の心をとらえている。流行語大賞の候補にも、シールズが入った。「明るい」「入りやすい」。これまでのスローガンは鋭く、固い。シールズの運動はやり方も違う。このスタイルは見習っていい。
- ・ 総選挙などでの投票率が低いのは、小選挙区制度の選挙制度に関係するのではないかな。政治不信が大きいこともある。

——同志社大学 1 回生——

- ・ わたしの名前は、両親が「みんなと協力して、手をつないで生きていってほしい」との願いを込めてつけた。生まれたときから「平和に」につながっていた。戦争に関する絵本をよく読んでもらっていた。イラク戦争は8歳の時。父母は共産党員で、「戦争が起きたらどうする」などとたずねていた。
- ・ 日本では戦争につながる流れはないし、大丈夫だと思っていた。しかし、特定秘密保護法ができてしまった頃から、自分の意思、国民の意思に関係なく進んでいる。『危険だ』。
- ・ 何も見えていない。将来の希望もなく、ブラック企業で働くしかないと考えるなど、気力もなく、あきらめている人も多いと思う。
- ・ 競争教育の影響もあり、何も考えなくなっている。若者はそれなりに「考える力」を持っており、大人が思っているほどアホじゃない。デモや抗議集会に参加するのにも勇気はいること。
- ・ 今こそ、声を上げなければいけない。これまでの世代の人たちが運動をしてこなければ、これまで何もしてこなければ、「何を見本にしたら・・・」となっていた。みなさんがつづけてきた運動があったからこそ、真っ暗でなくグレーでとどまっていた。

(文責 常任世話人 新妻義輔)